



Title	＜紹介＞大橋正叔著『近松浄瑠璃の成立』
Author(s)	金, 智慧
Citation	語文. 2020, 114, p. 60-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85452
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

大橋正叔著『近松浄瑠璃の成立』

金 智慧

本書は、芝居作者である近松門左衛門の人物像とともに、近松浄瑠璃の作劇法と浄瑠璃本の出版過程に関わる諸問題を論じたものである。周知の通り、日本近世演劇研究における近松研究の蓄積は膨大であり、信多純一、松崎仁、内山美樹子など傑出した浄瑠璃研究者により近松浄瑠璃の分析が盛んに行われてきた。ところが、著者の関心は作品自体を論ずるより、近松の人間としての姿や作品の背後に存在する作者の立場、それから興行システムの变化による改作や浄瑠璃本の出版に関する近松と正本屋・太夫との関係といった作品を取り巻く外郭の問題の方に向けられている。以下に目次を示し、本書の概要を述べる。

第一部 作者近松

作者近松門左衛門の生涯

芝居作者への歩み

近松と「三槐九卿」

「作者近松門左衛門」推考

近松の後悔——一番の瑾今聞くに汗をながす——

コラム『曾根崎心中』——大坂へ——

第二部 近松浄瑠璃

茨木幸斎一件と海音・近松——『山椒太夫葎原雀』と『傾城酒吞童子』の上演をめぐる——

『日本西王母』をめぐる問題——改作と改版——

『信州川中島合戦』——勘介の母の死——

近松世話浄瑠璃における改作について

近松門左衛門と『世界』

『浄瑠璃文句評註難波土産』成立存疑

コラム『女殺油地獄』をめぐる

資料紹介

「国性爺大明丸」近松序」

『曾根崎心中』絵入り十四行本

まず、第一部の作者近松では、近松の出生から芝居作者になるまでの道程と芝居作者としての人生、そして通念を破り（ある意味、近代的観点で）作者としての自我を表出した近松の覚悟と矜持に焦点が当てられている。一般的に近松は浄瑠璃作者のイメージが強いが、本書で周到に分析されているように、武士の出である彼は作者になる前、京都の公卿たち（「三槐九卿」）に奉仕した経験をする。このような経験を通し、公家の持つ文化的環境に触れたことは、近松がのちに博識で広い教養を備えた芝居作者に成長する土台となった。その後、宇治加賀掾に作品を提供することで浄瑠璃作者の第一歩を踏み出した近松は、やがて竹本義太夫という知音に出会い、大成する。加賀掾のもとでは作者として自

立できないと判断した近松と、自分のための良作が欲しかった義太夫の提携は以後、数多くの名作を生み出していく。なお、著者は両者の大成の後ろ盾であった正本屋山本九兵衛の存在に視野を広げ、近松が浄瑠璃正本の内題下に「作者近松門左衛門」と署名し、自己主張することができた背景を明らかにする。一方で、著者は近松が浄瑠璃のみならず歌舞伎作者を勤めた点を踏まえ、古浄瑠璃の歌舞伎化や歌舞伎の当世風を取り入れた世話浄瑠璃の誕生、浄瑠璃に歌舞伎の演出・手法を援用した事例などを取り上げ、当時の芝居界で縦横無尽の活躍をした近松の全貌を徹底解明する。以上の内容に加え、近松の作劇に対する苦悩にも目を配るなど、本書は武士・浄瑠璃歌舞伎作者・舞台演出家としての近松像を実に多角的に捉えている。

第二部の近松浄瑠璃では、主として諸状況に対する近松の戦略、そして近松浄瑠璃の改作・改版の問題を論証する。例えば、茨木屋幸斎の事件を脚色するにあたり、豊竹座の紀海音に先手を打たれた近松は、海音が利用した山椒太夫の世界ではなく、茨木幸斎を酒吞童子に結び付け、新たな作劇を試みた。海音作『山椒太夫・葎原雀』の上演後、その方法を踏襲した歌舞伎や浮世草子の作品が続出したものの、近松はそれらの作品との差別化を図り、酒吞童子の世界に切り替えたのである。なお、『信州川中島合戦』の三段目に描かれる勘介の母は『通俗三国志』の徐庶の母がモチーフになっているとの指摘もなされている。一方、改作・改版の問題に関しては、近松が竹本義太夫と宇治加賀掾に提供した同種の作

品『日本西王母』（義太夫）と『南大門秋彼岸』（加賀掾）を取り上げ、書誌的に分析した上で内容を比較対照し、さらに類似したケースである『大覚大僧正御伝記』（義太夫）と『女人即身成仏記』（加賀掾）の関係も照らし合わせて、前後関係に対する著者の見解を示す。ひいては、後世における近松浄瑠璃の改作まで丹念に調べ、上演形態や観客の嗜好が変化したゆえに改作せざるを得なかった事例も紹介する。それと同時に、著者は近松浄瑠璃における「世界」の適応について注意を喚起している。要するに、近松は結果として作品の大きな枠組みになる「世界」の概念を作っているものの、創作する時点でそれを意識してはいなかったということ、さらに「世界」を以て近松浄瑠璃を分析していくと捨象されるところが大きくなるということへの戒めである。

以上、とりとめのない概要説明になってしまったが、作者近松と近松浄瑠璃に対して幅広く、しかも緻密に追究していく本書を紹介するには筆者の力量が及ばない。しかし、近松浄瑠璃を論じつつ、広くは日本古典演劇史の中で自明のものとなっている常識、例えば、「世界」という概念や「時代」と「世話」の分類、「改作」と「翻案」の区別などを問い直す点において、浄瑠璃に限らず日本芸能の諸問題を再考するに本書の示唆するところが大きいことは確かであろう。

（八木書店、二〇一九年六月、四四〇頁、一一、〇〇〇円＋税）

（きむ・じへ 本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）